

「私のこの一冊」

「決断力」 羽生善治

角川 One テーマ 21

慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 石倉洋子

本書は、将棋界の第一人者である羽生善治氏がこれまでの対局の経験や将棋に関する思考について誰にでもわかりやすい言葉で書いたものである。2005年出版だが短いけれどハッとするような意味の深い言葉が至る所にちりばめられており、今読んでも勇気を与えてくれる。

将棋の世界は、情報化によってここ10年大きな変化をとげてきた。過去の対局や棋譜などの膨大な情報が蓄積され、ごく短時間に棋譜が整理され、データベース化されるようになった。限られたプロ棋士にしか得られなかった情報が、誰にでも得られ、戦略や戦術の研究や分析が多くの人によって行われ、プロ棋士の世界がオープン化されてきた。

一方、情報自体の希少性が次第になくなる中、新たな創意工夫が求められ、これまでの定跡や成功パターンの有効性が根底から問われている。

将棋界に起こっているこうした変化は、情報化がもたらす質的变化の意味を垣間見せてくれる。情報自体を知らないとそもそも競争の場にあがれないこと。同時に、知識だけでなく独自のアイデアや発想がなければ勝ち続けることが困難であること。一方、限りない組み合わせや新しいアイデア、着想の可能性が開かれていること。情報化の恩恵と新たな課題を示している点で、多極化の進む世界、厳しくなる一方の企業を巡る事業環境にも通じる。

羽生氏の次のような言葉は、一局ごとに明らかな勝負がつく将棋の世界で毎日戦う厳しさ、ゼロサムの戦いを繰り返してきた経験から出たものである。「怖くても前に進もうという勇気を試されるのが決断」「机上で学ぶだけでなく実戦で試して初めて身につく」「最先端を目指し積極的にリスクをとっていかないと力が弱る」等々の言葉は、世界、日本、企業経営、個人の生き方などあらゆる局面において、これまでとは質の違う課題に直面している私達がどんな姿勢で臨むべきか、を示唆している。

また、「最先端の将棋は集中より拡散している」、「困難な課題に正面から向かってこそ新たな道が開かれる」という言葉は、目指すべき方向や戦略・戦術を決めることに苦慮しているマネジメントにも大きな励ましとなるだろう。新しいやり方が多数登場していて、それを見出すことに喜びがある、と考えられるからである。

毎日が世界の強豪との「戦いの場」となっている企業経営にも、断固たる決意と意思が必要であるが、ともすれば課題の大きさに足がすくんでしまい、決断を避けたり先送りしたい気持にもなる。しかし、「追い詰められた時にこそ大きな飛躍の可能性がある」「複雑な時こそ単純に考える」という羽生氏の言葉は、成功している企業の戦略が、後から見れば簡単で単純、誰にでも理解できる美しいものであることを思い出させる。